

ツツバ語を取り巻く言語状況とツツバ語の音素

京都大学大学院
内藤 真帆

本稿はヴァヌアツ共和国におけるフィールドワークを元に、ツツバ語を取り巻く言語状況とツツバ語の音素について考察している。

ツツバ語は100余りあるとされるヴァヌアツの現地語の一つで、これまでにほとんど研究されていない。

0. はじめに

南太平洋に位置するヴァヌアツ共和国は、大小さまざまに異なった83の島々から構成されており、その島々がY字状につらなっているのが特徴的である。この国の面積は日本の新潟県とほぼ同じ大きさの1万2,189平方キロメートル、人口は2001年の時点でおおよそ20万人と報告されている（「外務省 各国・地域情勢」）。

ヴァヌアツでは英語をベースとしたビスラマ語のほか、英語とフランス語が公用語として用いられている。このうち、教育で用いられる言語としては英語とフランス語の二つが規定されており、今日では一部ビスラマ語の使用が許可されたものの、数年前までは授業中ビスラマ語を使用することは容認されていなかった。

2001年に訪問したサント島に位置する中高教育が行われている学校には、ランゲージポリシーが掲げられており、それにビスラマ語を就業時間内に教室で用いた生徒には罰を与える、と記されていたことからそれは分かる。その罰則というのは校庭を走ったり草むしりをしたり、という内容のものであったらしい。

ヴァヌアツにはこれらの公用語以外にも数多くの現地語が存在しており、その数は100にもものぼる。これらの現地語の話者数は言語によってまちまちで、言語によっては数千人の話者が存在するものもあれば、話者数100人に満たない言語もいくつか存在する。また、話者が減少し続け、もはや完全に消滅してしまった言語もある（Lynch

and Crowley 2001）。

ヴァヌアツに住む大半の人は現地語とビスラマ語の両方を話すが、中には特定の現地語を母語としない人もいる。たとえば、両親が異なる現地語話者であり、家庭においてもつばらビスラマ語が用いられている場合、その環境で育つ子供はビスラマ語を母語とすることが多い。また、都心部ではさまざまな話者が集まっているため、ビスラマ語の用いられる頻度は地方に比べると高い。

ヴァヌアツの現地語は、オーストロネシア祖語から派生したと考えられており、主に二つに下位分類される。一つは、南オセアニアグループ¹（Southern Oceanic group）、もう一つは中央太平洋グループ（Central Pacific group）である。前者はさらに北中央ヴァヌアツ下位グループ（North-Central Vanuatu subgroup）と南メラネシア下位グループ（Southern Melanesian subgroup）に分けられ、今回考察の対象としているツツバ語は、北中央ヴァヌアツ下位グループ（North-Central Vanuatu subgroup）に位置付けられている（Lynch 1998: 48）。

1. 家庭で使用される言語比

ヴァヌアツの家庭では、現地語の用いられる割合が最も高く、使用の割合としては全体の約7割を現地語が占め、続いてビスラマ語が2割、続いて英語、フランス語の順となっている。さらにこれを首都と副首都、そしてこれら都心部以外の地域に分けて見てみると、都心部では現地語の使用は全体の3割であるが、ビスラマ語はおおよそ6割となっている。また、都心部以外の地域では現地

¹グループ名の日本語訳は内藤による。

² この章のいずれの数値も小数点以下を四捨五入しているが、都心部の現地語使用のみ小数第二位を四捨五入した。

語の使用が 8 割 5 分程度、ビスラマ語が 1 割強という数字が出ている。都心部の家庭では現地語よりもビスラマ語が多く用いられており、都心部とそれ以外の地域では現地語とビスラマ語の使用比率が逆転することが分かる(National Statistics Office. 2000: 28, 130)。

2. ツツバ語が使用される土地

ツツバ語はツツバ島と副都心の置かれるサント島の一地域、ミリオンダラーポイントで使用されている。しかしツツバ語の会話中にビスラマ語の語彙が用いられるといった状況が頻繁に観察された。またミリオンダラーポイントにはツツバ島出身以外の者も住んでいるため、この地ではツツバ語よりもむしろビスラマ語が使用されているようである。

2.1. ミリオンダラーポイント

ツツバ語はツツバ島で用いられているほか、対岸のサント島に渡った人々がコミュニティを形成したミリオンダラーポイントという地でも使用されている。ミリオンダラーポイントにツツバ島から人々が移住したのはそう何世代も前の話ではないらしい。土地を所有していた最初の移住者が木々を伐採し、地ならしして生活空間を作り上げると次々に親戚の者や希望者が移住し、結果ツツバ島出身者やその近隣諸島の出身者が一つのコミュニティを形成する形となった。ここでの人々の生活はほぼツツバ島と変わらない。ただし、この土地にはコブラを栽培するような巨大なプランテーションが存在していないため、自生している植物を食料として生活している人が多い。しかし中には、ごくわずかではあるが副都心で働き、現金収入を得ている人もいる。

多種多様な言語が存在するサント島での生活は、一つの島でほぼ一つの現地語が使用されているツツバ島に比較すると様々な言語話者との出会いが多くなる。ゆえにヴァヌアツ共和国の共通語として機能するビスラマ語を使用する機会も必然的に増えている。ミリオンダラーポイント内においては、必ずしも第一言語でないもののそれと同程度にビスラマ語が人々に浸透しているため、ツツバ語話者間でさえツツバ語ではなくビスラマ語を用

いる頻度が高い。

2.2. ツツバ島の立地と人々の生活

対象言語が主に使用されているツツバ島は、副首都の置かれるヴァヌアツ最大の島であるサント島のやや南東に位置し、南緯 15.3 度から 15.4 度、東経 167.2 度から 167.3 度の間に位置する。面積はおおよそ 13.9 平方キロメートルで、渋谷区を小さくした程度の広さである³。ツツバ島はジャングルとプランテーションがその面積の大半を占めており、海岸線に沿った道と内陸を結ぶ道沿いに 10 あまりの村が点在している。

村と村とを結ぶ道は舗装されておらず、島内部の移動は徒歩によって行われ、海岸沿いの移動はカヌーや小型ボートによって行われることもある。電動式のボートでツツバ島とサント島間の移動に有する時間には天候が影響し、おおよそ 20 分から 40 分である。ツツバ島で電動式のボートを所有するのはごくわずかな人々であり、他の島に移動するにはこのボート所有者に一定の額を支払う必要がある。ボートは栽培、燻製させたコブラをサント島で売買するための人の移動に用いられるのを除いて、多くの場合魚を捕るために使用されている。

1999 年に 15 歳から 64 歳を対象に行われた国勢調査では、ツツバ島の対象者 212 人中、現金収入に携わるのは 43 人であるという結果が出ている(National Statistics Office. 2000: 174)。この現金収入に関わる人の多くは、島の内陸部にあるプランテーションでコブラを栽培していると考えられ、それ以外の多くの人々は島でほぼ自給自足の生活を送っている。しかし近年はコブラの価格が下がり、コブラ栽培者の現金収入もかつてほどはないようである。島にはタロイモ、キャッサバ、ヤムなどの芋類を始めとし、アイランドキャベツ、バナナ、ココナツ、パパイヤといった野菜、果実が数多く自生し、一年を通して食物には事欠かない。

3. ツツバ語

3.1. ツツバ語の話者数

³ いずれも少数第二位を四捨五入した。

ツツバ島の人口は 1967 年に 158 人、1979 年に 229 人、1989 年に 315 人、そして 1999 年には 518 人とこの 30 年あまり急速に増加しており、ツツバ語の話者数は 500 人程度だと考えられている (Lynch and Crowley 2001)。

ツツバ島には 1999 年時点で 90 世帯、総人口 518 人が生活しており、その内訳は女性 237 人、男性 281 人となっている。言及なしの 49 人を除く 469 人を年齢別に見ると以下ようになる (National Statistics Office. 2000: 54)。

年令	0-9	10-19	20-29	30-39
人口	172	119	62	53
年令	40-49	50-59	60-69	70 以上
人口	34	13	9	7

ツツバ語はビスラマ語や他言語の影響を受けつつ刻々と変化し続けており、その変化を高齢者と若者の差異に垣間見ることが出来る。例えば、父親という語彙がかつてツツバ語で *tama* であったことを知るのとはもはや高齢者だけとなり、中年世代以下は *tata* という表現を用いている。もともと *tata* というのは他の現地語において父親という意味で用いられていた語であったらしいが、その事実を知っているのはもはや高齢者だけである。また、音声にも差異が生じているが、これは音の仕組みを説明した上で 3.4.3.4.において詳しく扱うことにする。

3.2 調査方法とインフォーマント

2002 年に現地で調査を行なった際に用いたのは、東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所が発行している基礎語彙集『1966 年. アジア・アフリカ言語調査票 上』で、これは第 1 表 (A) 200 語 + (B) 300 語と第 2 表 (C) 500 語の計 1000 語から構成されている (A, B, C は基礎度の段階の順)。

調査の初めは 30 代の女性に協力をお願いしたが、のちに高齢者にも同様に協力を仰いだ。その結果、世代間における音声の違いが観察された。

本稿は数々のツツバ語話者の協力に基づいているが、中でも 30 代半ばの女性と 70 歳代の男性二人を継続的な協力者として得られたデータを分析し記述することに努めた。調査は全てビスラマ語のみで行い、特に抽象的な語には、言語による概

念の差異を考慮に入れたうえで誤差を無くすように繰り返し質問し、説明を求めた。本稿ではこれらの方々から収集したデータを音の側面から扱っている。

現地では通常、朝 7 時に起きて朝食をとり、8 時から調査(勉強)を開始していた。一日およそ 3 時間から 4 時間かけてツツバ語を調査することに努め、その学習から日常生活にいたるまでの全てをビスラマ語で行った。時には食事の準備や畑仕事、水汲みなどを手伝いつつ、現地の生活を体験する中でさまざまな語彙や表現を学んだ。日中は子供たちと過ごし、夜 7 時ごろ夕食を済ますと、その後は星を見ながら互いの国や家族、その日の出来事などについて語り、9 時ごろ就寝するという生活を送った。

3.3. 先行研究

ツツバ語を専門に扱った文献は特に見うけられないが、基礎語彙に則ってツツバ語 300 語弱を音声表記したものとそれらがオセアニア諸語とどのように対応しているかを記載した *New Hebrides Languages* (Tryon 1976) が先行研究として挙げられる。調査はこの先行研究の基礎語彙表を網羅するよう配慮して行った。

3.4. ツツバ語の音素

3.4.1. 最小対、音素、音声、異音

はじめに、最小対とはどのようなものか、音素とは何であるか、音声とは何か、そして異音とは何か、それぞれの定義に触れたのち、ツツバ語を論じることとする。

最小対

日本語の「金」、「銀」の二語は意味が異なる。「金」、「銀」のように、語頭などといった同一位置で音がひとつだけ違う単語の対を最小対といい、この最小対を使ってその言語の音素を取り出すことが出来る。なお、音声記号は [] に包んで表し、音素は / / に包んで音声記号と区別する (中島他 1994: 86-87)。

音素

音素とは意味の違いを伴う音のシステムのことである。たとえば「金」、「銀」の違いは語頭の [k]、

〔g〕に由来しており、これらを入れ替えると単語の意味が変わってしまう。つまり、これらの単音は意味を変える機能を担っていると考えられ、ある言語において意味を変える役割を持つ音を音素と呼ぶ (中島他 1994: 86)。

音声

音声とは通常わたしたち人間が意味を伝えるときに用いている音そのもののことである。たとえば、次のそれぞれの語に含まれている、“ン”の発音に注意しながら「日本橋・日本刀」と口に出して言ってみると、「日本橋」では“ン”で両唇が閉じるが、「日本刀」では唇を閉じることはなく、代わりに舌の先が上の歯茎に触れて閉鎖を作っている。このように、音を作り出す際に舌の位置はそれぞれ異なっており、ひとつの音だと思っていた“ン”が実際には異なった音で発音されていたことになる。両唇が閉じた「日本橋」の“ン”と舌の先が上の歯茎に触れて閉鎖を作った「日本刀」の“ン”のどちらも「日本」部分の発音として機能し、音は違うもののそれが意味の違いをもたらすことはない (天沼他 1978: 46・47)。

異音

上の音声の例では、「日本橋」の“ン”と「日本刀」の“ン”は音素/ン/の具体的なあらわれであり、音素/ン/の異音である、という (天沼他 1978: 57)。

3.4.2. ツツバ語の母音音素

ではツツバ語にはどのような音素が用いられているのだろうか。下にツツバ語の音素(母音)と最小対を示す。

母音 /i e a o u/

最小対

i/e /bai/ ‘肩’
/bae/ ‘ジャンプする’

i/u /asi/ ‘ロープ’
/asu/ ‘煙’

e/a /meβ/ ‘～し終わる(完了)’
/maβ/ ‘大地’

e/o /βel/ ‘踊る’
/βol/ ‘買う’

a/o /nna/ ‘彼・彼女・それ(三人称単数)’
/nno/ ‘あなた(二人称単数主語)’

o/u /aβo/ ‘双子’
/aβu/ ‘灰’

このように母音が基本母音五つから構成されている言語には、他に日本語⁴、スペイン語、フィリピンのタガログ語などがあり、五大大陸にまたがる 754 言語中、この五つを単音の口母音とする言語は 24%である (アジェージュ 1990: 24)。

3.4.3. 子音

3.4.3.1. 音を作り出す場所と方法

人間が音を発するとき、肺から押し出された空気は、のど、口、鼻といった発声器官のなかでさまざまな音色の言語音を作り上げ、そして唇や鼻から出て行く。音声学的には肺を出た空気が比較的自由に妨害なく流れるものが母音であり、妨害を受けるものが子音であると定義づけられる。子音は空気の流れが妨害を受ける位置 (調音位置) と、妨害のされ方 (調音法) でさらに分類される (中島他 1994: 82)。

空気の流れを妨げる調音位置を表す語の一例を以下に挙げる。

調音位置

「ば」の子音〔b〕を発音するとき両唇は閉じている。この音の調音位置は両唇と呼ばれ、ここで調音される音は両唇音と呼ばれる。また、「た」の子音部分〔t〕は舌先で上の歯のうしろに触れたときにある出っ張りの部分、つまり歯茎部が調音位置であり、これは歯茎音と呼ばれる。さらに舌先をうしろに動かすとごつごつした硬い部分があり、ここを硬口蓋、その奥の柔らかくなっている部分は軟口蓋と呼ばれ、それぞれの位置で調音される音を硬口蓋音、軟口蓋音と呼ばれる。

⁴ ただし多くの方言で u は円唇ではなく非円唇となる。

調音法

次に、調音法の例を以下に示す。空気をいったんせき止め、一気に破裂させる [b]、[t] などの調音法を破裂音といい、一方、「さ」の子音部分 [s] の音は空気が狭い隙間で摩擦をおこしながら流れ出るので摩擦音と呼ばれる。

「ば」の子音部分、[b] は両唇を閉じて空気をせき止めるので調音位置は両唇であり、また調音法としては、両唇の位置で空気をいったんせき止めてから一挙に破裂させる破裂音である。調音位置と調音法をまとめて [b] は両唇破裂音と呼ばれる。

有声と無声の対立

声を出しているとき、のどに手を当てると震えが感じられる。この震えは声帯の振動によるものである。声帯が振動する音を有声音、振動しない音を無声音といて区別するが、ツツバ語では全ての母音は声帯の振動を伴うので有声である。逆に子音は有声音と無声音に分けられる。たとえば [p] は調音位置が両唇、調音法が破裂、そして声帯の振動を伴わないので無声両唇破裂音と呼ばれる。一方、これと対をなすのが、調音位置、調音法は [p] と同じであるが、発音の際に声帯が振動する [b] で、こちらは有声両唇破裂音である。

3.4.3.2. ツツバ語の子音音素

子音 /b t d k m n ŋ r β s h l
(w) (j)/

まず、上記した子音音素群の中の、(w)と(j)の音について言及しておくこととする。

[w]、[j] の二つは、わたり音 (3.5.参照) であるとは考え難い環境にあらわれていたケースがそれぞれ一つずつ存在した。これらは共に、あらわれた環境から

①子音の音素/w/、/j/であるか、

② [w] は母音/u/の、[j] は母音/i/の異音のひとつである、

と考えられる。残念ながら現時点では出現頻度の低さゆえに、①、②のどちらとして扱うのが妥当であるか明白ではない。従って、ここでは子音音素の可能性もあるという点を考慮して、子音の音素群に括弧付きで j, w を掲載した。この二つに

関しては、今後の調査においてさらなる語彙を収集した上で、①、②のどちらの扱いがより妥当であるかを考察したい。

では、ツツバ語における子音の最小対を以下に示すことにしよう。なお、(w)と(j)の最小対は見つかっていないため、示していない。

b/β	/bai/	‘肩’
	/βai/	‘作る’
d/t	/udu/	‘歯’
	/utu/	‘しらみ’
k/ŋ	/kaβa/	‘～へ行く’
	/ŋaβa/	‘広い’
m/n	/meme/	‘舌’
	/mene/	‘ここ(場所)’
r/l	/roso/	‘熱を持つ・熱がある’
	/losol/	‘水浴びをする’
s/l	/sasa/	‘働く’
	/sala/	‘道’
h/φ	/baheo/	‘鮫’
	/baeo/	‘パンの実’

3.4.3.3. ツツバ語の/b/、/d/

ツツバ語の/b/、/d/の調音法は、[^mb]、[ⁿd] のように、鼻音 [^m] や [ⁿ] が閉鎖音 [b]、[d] の直前に加わった前鼻音化閉鎖音としてあらわれる。なお、/d/は [d] ではなく [d̥] と発音されているが、[d̥] は [d] と舌の先がそり返っている点で異なる。ただし、これら [^mb]、[ⁿd̥] は次のように、あらわれる環境によっては前鼻音化閉鎖音ではなく、閉鎖音 [b]、[d] で発音されている。たとえば/baheo/ ‘鮫’のように、語頭に/b/がある際、多くの場合これは [b] と発音されるが、文中でその語が強く発音される時や「何がいた？」「鮫」というやり取りに出てくる「鮫」のように、その一語だけが発話される場合において/baheo/の/b/は [^mb] と発音される。/d/に関しても同様に、環境と状況によって [d̥] と発音される時と [ⁿd̥] と発音される時とある。ただし、この違いにより単語

の意味が異なることはない。

一方、/abu/ ‘火’のように語中に/b/があるとき、これは [ʰb] と発音される。/d/も同様にこれが語中にあるときは [ʰd] となる。

3.4.3.4. ツツバ語の/β/

この言語において/β/は世代によって音声が変わっている。70 代の高齢者は [β] と発音しており、30 代やそれより若い世代は [ϕ]、[f]、[v] で発音していることが多く、特に若い世代はそうであった。

これらの音のそれぞれの調音位置、調音法は次のようになる。[β] の調音位置は両唇で調音法は摩擦音である。また、発音する際に声帯の振動を伴うので、有声である。

この音は日本語の中にも使われており、「しばらく」という挨拶のことばを気軽に発音したときの「ば」([βa])などがこれにあたる(天沼他 1978: 65)。[b]との違いは、唇を完全に閉じずに、ゆるく開いた状態で発音するところにある。[β]は有声両唇摩擦音であるが、無声の両唇摩擦音が [ϕ] である。この音も日本語に使われており、は行の中の「ふ」([ϕu])がこれにあたる。[f]、[v]はともに上の歯が舌の唇に接してそこで空気の摩擦を作る唇歯摩擦音であるが、[f]が声帯の振動を伴わない無声、[v]が振動を伴う有声という点で対立する。

ツツバでは高齢者がバナナを [βatali] と発音していたのに対して、若者は [ϕatali]、[fatali]、[vatali] と発音していた。若者が使用していた [ϕ]、[f]、[v] の音は同じ音声的環境にあらわれるが、意味の違いをもたらすことはない。また、一語中に/β/が二つ以上あるとき、中年世代には語における/β/のあらわれる位置によって [f] と [ϕ] の発音を使い分ける傾向が見られた。次に挙げるのは 50 代男性の音声である。二度発音してもらったために観察された音のゆれも記録している。

/βaβine/ [faβine] ‘女性’

/βituβoβora/ [fituϕoϕora] ‘星’

/duβduβ/ [duϕduϕ] ‘草’

/βiriui/ [firiɟu] ~ [ϕiriɟu] ‘犬’

/βereone/ [fereone] ~ [ϕereone] ‘砂浜’

語に/β/の音が二度以上用いられている場合、語頭

の/β/は [f] で発音され、語中の/β/は [ϕ] で発音される傾向にある。また、/β/が語頭に一度だけ使用される場合は [f] もしくは [ϕ] となり揺れる傾向にあった。

ツツバ語でなぜ高齢者が [β] で発音している箇所を若者が [ϕ]、[f]、[v] と発音し、その中間の世代である中年層が発音上 [ϕ]、[f] を使い分ける傾向にあるのかは定かではないが、この変化にはビスラマ語が影響しているのではないかと考えられる。

ビスラマ語の影響は文中においても頻繁に見られる。中でも次に挙げた二つの例文のように、語彙の借用が多く、特に中年以降の世代の話者に多く観察される。

ka wasi na ruru-ku
～したい (一人称単数) 洗う ～を 服・私の
‘私は服を洗いたい’

この文では、‘wasi’ というビスラマ語が借用されている。また次の文では、星をあらわす語彙にビスラマ語である ‘sta’ が借用されていた。

me-te-te sta
三人称単数・否定・存在する 星
‘星は出ていない’

3.5. わたり音 [j]、[w]

わたり音は音素と音素の間に生じる音声のことで、ツツバ語のわたり音 [j] と [w] はそれぞれ次のような音素間に生じる。

わたり音 [j] :

① e と a の間で生じる:

ϕ → [j] //e/_/a/
/etea/ → [eteja]

[etea] とは発音されず、/e/と/a/の間に [j] が生じ [eteja] と発音される。

② /i/と後続母音/a,o,u/の間に生じる:

ϕ → [j] //i/_V(a,o,u)
/kamiu/ → [kamiju]

/kamiu/というのは‘あなたたち’という意味の語であるが、[kamiu]ではなく、[kamiju]と

発音されている。このように、/ia/, /io/, /iu/といった音素配列において、実際の発音では/i/と、母音/a, o, u/の間に [j] が生じる。

わたり音 [w] :

① o と a の間で生じる :

$\phi \rightarrow [w] / /o/ _ /a/$

/oari-fiae/ $\rightarrow$ [owari-fijae]

音素/o/と/a/の間にわたり音 [w] が生じる。

②u と後続母音/i, e, a/の間に生じる :

$\phi \rightarrow [w] / /u/ _ V(i, e, a/)$

/nuenue/ $\rightarrow$ [nuwenuwe]

音素/u/と/i, e, a/の間にわたり音 [w] が生じる。

わたり音はこれらの環境において、規則正しくあらわれることが確認されている。

まとめ

本稿はヴァヌアツ共和国で使用されているツツバ語を記述することを目的とした。特にヴァヌアツの言語状況、ツツバ語の用いられる島、話者数といった背景を記述した上で、ツツバ語の音に焦点を当てている。

はじめに音素と音声の違いを明らかにした上で、ツツバ語には母音/i e a o u/, 子音には/b t d k m n ŋ r β s h l (w) (j) /が音素として存在していることを示した。またわたり音 [j] と [w] が、どのような環境に生じるのかを記述した。

ツツバ語の話者は現在500人程度であると見積もられているが、若い世代は高齢者と比較すると発音やビスラマ語の語彙を多用するという点で異なっている。今後、時間の経過とともにツツバ語を取り巻く環境がどのように変化し、同時にツツバ語がどう変化していくのか、非常に興味深い。

【 謝辞 】

インフォーマントとして協力して下さった Vemoli, Elizabeth, Sara, Tura、そして日常生活

でお世話になった Suzan とそのご家族、現地の学校で快く資料を提供して下さった先生方、どうもありがとうございました。また調査していく上で様々なアドバイスを下さった大角翠先生、三谷恵子先生、John Lynch 先生、Robert Early 先生、Cultural Centre の Catriona Hyslop さん、本当にありがとうございました。ここに記して深甚なる謝意を表します。

参考文献

天沼寧・大坪一夫・水谷修 1978 『日本語音声学』くろしお出版

クロード・アジェージュ著 東郷雄二・春木仁孝・藤村逸子訳 1990 『言語構造と普遍性』白水社

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 1966 『アジア・アフリカ言語調査票 上』

中島平三・外池滋生 1994 『言語学への招待』大修館書店

D. Jauncey. 1997

A Grammar of Tamambo, the Language of Western Malo, Vanuatu. Unpublished PhD thesis, Australian National University.

J. Lynch. 1998

Pacific Languages: An Introduction. Honolulu: University of Hawai'i Press.

J. Lynch and T. Crowley. 2001

Languages of Vanuatu: A new survey and bibliography. Canberra: Pacific Linguistics 517. The Australian National University.

D. Tryon. 1976

New Hebrides languages: An Internal Classification. Canberra: Pacific Linguistics, C-50. The Australian National University.

National Statistics Office. 2000

*The 1999 Vanuatu National Population
and Housing Census.* Port Vila:
National Statistics Office.

Statistics Office. 1993

Administrative Report of the 1989 Census.
Port Vila: Statistics Office.

「外務省 各国・地域情勢」

<<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/vanuatu/data.html>> (2003/8/20 アクセス)

公園の注意書き(ビスラマ語で書かれている)

於：サント島

